第18回日本臨床脳神経外科学会、開催まであと1カ月！

〈近未来の臨床脳神経外科のゆくえ〉

会期：2015年7月18日（土）・19日（日）　会場：ホテルオークラ神戸

◆問合せ：医療法人社団英明会 大西脳神経外科病院　TEL 078-938-0867　FAX 078-938-1538　http://18jansc.jtbcom.co.jp/

会長：大西 英之（大西脳神経外科病院（明石市）理事長・院長）

平成10年の開催以来、初めて神戸での開催となる、第18回日本臨床脳神経外科学会。開催まであと1カ月余りとなり、演題募集や事前参加登録などにも拍車がかかり、すべての準備が順調に進んでいます。演題数も過去最高となったそうです。阪神大震災から20年、神戸で開催される大きな学会には大きな期待が寄せられています。準備の総仕上げに余念のない、医療法人社団英明会大西脳神経外科病院理事長・院長で、今回の学会の会長を務めておられる大西英之先生に、学会のコンセプトや今回の特徴などについてお話を伺いました。

――順調に準備が進んでおられるそうですね。参加者はどのくらいを見込まれていますか。

大西　講演していただく先生方も内容も決まりましたので、抄録集が出来上がりますと一段落します。あとは細かい打ち合わせがいろいろとあります。5月半ばに締め切りましたが、演題数は一般演題数373題、指定演題数82題の合計455題で、過去最高となりました。参加事前登録も締切りましたが、当日参加も大歓迎です。

本学会は、日本病院脳神経外科学会という名称で始められた学会で、当初は開業している病院が主体でした。しかし昨年度より、日本臨床脳神経外科学会と改め、広く臨床を行なっている大学病院や公的病院などすべての病院に声をかけて行われるようになりました。今回は非常に広がっています。参加人数は1500人以上になると思われます。

神戸での学会は意外と少ないので、楽しみに来ていただけるのではないかと思っています。

――この学会の特徴はどんなところにありますか。

大西　本学会の特徴は、脳神経外科医のみならず、薬剤師、看護師などチーム医療を担うすべてのコメディカルスタッフ、病院で勤めるあらゆる職種の人々が一堂に会し共に学び、会員相互の交流を図ることも大きな目的の1つとしていることです。

脳神経外科の場合、ICU、HCU、SCUではドクターは毎日15分程度の診察ですが、その他の時間は看護師さんが看てくれています。看護師さんの協力やお互いのコミュニケーションなど、看護師さんのレベルが上がらないと医療現場は前に進みません。またレントゲン技師のきれいな写真も絶対に必要なものですし、リハビリには理学療法士、嚥下などに関してはST、治療の過程では栄養士の役目も大切です。1人の患者さんの1疾患に多くの人員が携わっています。実際の病院での診療の過程において、各職種の協力は欠かすことが出来ません。

脳神経外科を取り巻く諸問題を整理し、近未来の脳神経外科学の発展につなげる

学会のテーマは〈近未来の臨床神経外科のゆくえ〉です。

世界は非常に混沌としています。地球の温暖化と砂漠化、人口の爆発的な増加と食糧危機、アラブの春は一転して政治・宗教の混乱と紛争、ウクライナに絡むEUやアメリカとロシアの対立、中国と近隣諸国との対立、日本、中国、南北朝鮮の対立等々。一筋縄で解決できない問題が山積しています。

国内では消費税を上げても追いつかない財政赤字や老人医療費の増加、手厚い高度医療をすればするほど高騰し続ける医療費。世界で最も優れた医療システムを持ちながら、今後は、より低額で高品質な医療システムの再構築が求められるはずです。

脳神経外科の分野では、1970年代より科学の発展に伴って、目を見張る技術が臨床現場に導入され、診断のみならず治療成績も素晴らしく向上してきました。

しかし医療の場では、職業倫理の欠如が問題になるような事件が起こっています。

講演の内容も多岐にわたっています。文化講演では「日本のこれから」と題してお茶の水女子大学名誉教授で作家の藤原正彦さんに講演をしていただきます。

特別講演は3題。「日本の社会と医療のゆくえ」前全国社会保健協会連合長理事長・伊藤雅治先生、「iPS細胞を用いたパーキンソン病治療に向けて」京都大学iPS研究所・高橋淳先生、「これからの医師のキャリアパス」日本脳神経外科学会理事長・嘉山孝正先生。

教育講演のテーマでは「脳を守る薬と医療機器への期待」、「臨床脳神経外科における医療倫理」、「日本における脳神経外科看護の明日に向けて」、「心ある医療人を育てるには」、「DPCデータを用いたクリティカルパス・地域シェア分析」、「楽しく働くために～ナースのモチベーションアップの視点から～」など。

シンポジウムのテーマでは「脳神経外科領域におけるチーム医療の現状と問題点」、「認定看護師への期待と今後の役割」、「リハビリテーションの現状とこれから」、「脳神経外科領域の放射線治療の近未来展望」、「これからの医療と経営」など、医師による学術的なテーマだけに片寄らない、様々なアプローチから、脳神経外科の臨床が抱える問題に取り組みます。

初夏の神戸は爽やかな六甲おろしが吹き、山の緑と海のブルーがとても美しい季節です。学会初日の夜の懇親会は遊覧船を一艘貸切り、神戸港と明石海峡クルーズに出かける計画です。世界最長の明石大橋を船上から見上げる景色は圧巻です。多くの皆さまの参加を心からお待ちしております。実り多い会になるよう職員一同鋭意努力させていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

ドクターズ・イン・シネマ73

今回は中国映画「妻への家路」（中14）。監督のチャン・イー・モーは初期の「初恋のきた道」（中00）、高倉健と組んだ「単騎、千里を走る」（中05）などで有名ですが、08年に「北京五輪の開会式」の演出をした巨匠。主演はコン・リー、チェン・ダオミンの両名優と若いチャン・ホェウン。・・・これ、期待通りの「傑作」でした。

時まさに文化大革命の真只中。大きな駅近くの雑居住宅。年配の事務員リーは、反乱分子として強制収容所に送られた夫のダオミンの釈放を、バレリーナの娘のホェウンと寂しく待っています。或る夜、単独脱走を果たし、自宅にたどり着いた夫が「明日26日13時に駅で会いたい」とドア下にメモを残します。心配しながらも、喜ぶ妻。

一方、娘は隠れ紅衛兵。上官は「脱走者の情報は直ちに通報せよ」と命令し、バレーの教官も「舞踊団に選抜されるには、身辺を潔白に」と迫る。プリマを目指す娘は「指名手配中の父」を官憲に密告。翌日、父は妻に逢う事も叶わず、逮捕されます。

それから7年、革命の嵐が治まり、夫は「あの駅」に大勢の解放者と共に到着。そこには夫の名前を書いたプラカードを持った妻の姿が。しかし・・・「あのメモ」を握り締めた彼女は、駆け寄る夫に全く無反応。何と「記憶喪失症」を病んでいるのです。

夫は妻の近くに部屋を借り、接触を試みようとしますが、毎日プラカードを持って出迎えに行く彼女は、会釈して前を素通り。あぁ、哀しいシーンの連続です。

相談を受けた医師はこう助言します「奥さんが記憶を取り戻すキッカケをみんなで作りましょう。優しく、焦らないで、諦めないで」。涙ぐみながらも、頷く夫。

それからは通り道で、軽食堂で二人は他人として話し合います。夫は収容所から投函できなかった手紙の束を苦心の末、読み上げます。しかし聴いた彼女の反応は「貴方は私の夫の手紙をどこで手に入れたの？」。更に夫は彼女の部屋のピアノを修理し、二人の懐かしい曲を弾きますが、反応は「私の大事な曲なの。みだりに弾かないで」（涙）。

「記憶喪失」を扱うのは「映画の得意技」でしょう。現在と過去を繰り返し見せるのは簡単だし、周囲の人とのエピソードを詰め込めるし、大団円を音楽などで盛り上げるのも御家芸。逆に、これらを文学やラジオや舞台で描くのは中々ムツカシイ。

想い出せば「心の旅路」（米41）、「かくも長き不在」（仏61）、「博士の愛した数式」（06）、「ボーン・アイデンティティー」（米02）などがありますね。どの作品もグリア・ガースン、アリタ・ヴァリ、深津絵里、フランカ・ボテンテなどが、慕う男の記憶が戻る「その時」を待つドラマです。・・・さて、この老境に入った夫婦の場合は蘇るのでしょうか、そして娘との関係はどうなるのでしょう？

モー監督は「夫婦愛を描くとともに、若い人に歴史を伝承すべきだと思い撮りました」と述べ、意識的に昔のスタイルを選び優れた作品に仕上げています。

私も「微妙な夫婦物語」に感じ入りながら、幼い頃、新聞で見た「舞鶴港に着いた興安丸」や、NHKで聴いた「尋ね人の時間」を想い出し、「我々にも伝承すべき事柄は沢山あるなぁ」という想いにふけりました。

（白井松器械・白井秀明）